



# 東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

## 自閉症児の言語に関する研究の現状と課題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-05-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹尾, 勇太, 伊藤, 友彦 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/132624">http://hdl.handle.net/2309/132624</a>

## 自閉症児の言語に関する研究の現状と課題

竹尾 勇太\*・伊藤 友彦\*\*

特別支援科学講座

(2012年9月14日受理)

### 1. はじめに

自閉症という障害を最初に報告した米国の精神科医 Kanner (1943, 1946) は、自閉症児の心理面や行動面だけでなく言語面の独特な特徴にも注目している。その後の研究でも、自閉症児の言語の問題に関しては様々な研究がなされてきた。自閉症児への支援について考えた場合、社会性の問題や行動問題といった側面に目が向けられがちである。しかし、発達の過程でことばが話せない状態にとどまり続ける自閉症児もおり (Lord & Rutter, 1994; Lord, Risi, & Pickles, 2004)、言語の問題も自閉症児の理解においては重要な問題の一つである。

自閉症児の言語の問題は、社会性や対人関係といった自閉症の障害特性のため、語用論的側面に視点があてられていることが多い。言語を相手や場面に応じて適切に使用できるかどうかという語用論的側面の問題は、発話や話者の意図の理解に関わるため、自閉症児が最も困難を示す言語領域であるといわれている (神尾, 2007)。そのため自閉症児の言語の研究においては、語用論的側面の研究が多く、この傾向は日本においても同様である (Baltaxe, 1977; Bartak, Rutter, & Cox, 1975; 黒田, 1987; 佐竹・小林, 1989; Tager-Flusberg, 1981; Wetherby and Prutting, 1984)。

一方で、このような語用論的側面の研究に対して、統語知識のような言語知識そのものを自閉症児が理解しているかどうかについての研究は、極めて稀である。比喩や皮肉などを理解するには、ことばの文字通りの意味を理解することが前提となる。そのため自閉

症児の言語の語用論的側面に問題があるかどうかを検討するためには、前提として統語知識そのものを獲得しているかどうかを明らかにしておくことが不可欠であると思われる。

そこで本稿では、自閉症児の言語知識に関して統語的側面を中心にこれまでに明らかになっていることを整理し、今後の課題を提示する。以下では、2節において欧米における自閉症児の言語研究を概観する。さらに3節では日本語を母語とする自閉症児の言語研究を紹介し、わが国では統語的側面の研究がほとんど行われていないことを指摘する。最後に4節で日本における自閉症児の言語研究の今後の課題について述べる。

### 2. 欧米における自閉症児の言語研究

自閉症児の言語に関する研究には、欧米においても語用論的側面の研究が多い (Lord and Paul, 1997; Loveland, McEvoy, Tunali, & Kelley, 1990; Tager-Flusberg and Anderson, 1991; Tager-Flusberg, 1994)。これらの研究で、自閉症児は会話を持続させることや、会話の規則を守ることが困難であることなどが指摘されている。また、Tager-Flusberg (1981) は、それまでの自閉症児の言語研究を音韻、意味、統語、語用の側面から概観し、自閉症児は語用論的側面が、定型発達児や知的障害児と比較して困難であると結論づけている。

一方、近年では自閉症児の言語の形態論的側面や統語的側面の困難さに視点をのいた研究もいくつか行わ

\* 東京学芸大学大学院教育学研究科  
\*\* 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

れている。まず、形態論的側面の研究としては、過去形の“-ed”や三人称単数現在の“-s”といった形態素の省略や誤用がみられると報告されている。また自閉症児のこれらの形態素の省略や誤用を特異的言語発達障害 (Specific Language Impairment; SLI) 児と比較し、両者の類似性を示唆する研究がいくつか見られる (Bottin and Conti-Ramsden, 2003; Rice, Warren, and Betz, 2005; Roberts, Rice & Tager-Flusberg, 2004)。

Roberts et al. (2004) は、自閉症児と定型発達児を語彙年齢で統制し、自閉症児の時制に関して音声産出課題を実施した。その結果、自閉症児は三人称単数現在、過去形ともに定型発達児より著しく低い成績を示した。三人称単数現在の誤用で自閉症児に最も多いものは、他の形態素への置き換え (その多くが現在進行形の“-ing”への置換) であり、その次に多い誤りは“-s”の省略であった。また自閉症児は過去形についても健常児と比べて著しく誤りが多く、過去形の誤りは三人称単数現在と異なり、ほとんどが省略であった。また Roberts et al. (2004) では、不規則に変化する動詞の過去形について検討している。その結果、自閉症児は不規則変化動詞においても、定型発達児より有意に低い成績を示した。さらに Roberts et al. (2004) は、これらの結果を SLI 児と比較しており、自閉症児の文法的形態素に関する言語能力は SLI 児のそれよりやや低いと述べている。

また、Rice et al. (2005) は、自閉症児は形態統語面、特に動詞語尾に三人称単数現在や過去形を示す接尾辞を付加することに困難があり、SLI 児のもつ困難さと似ていると指摘している。このように、近年欧米では SLI 児にみられる文法障害が自閉症児にもみられる可能性にも目が向けられ始めている。

統語的側面の研究としては、知的障害児と比較した研究がみられる。知的障害を併せもつ自閉症児の場合、話しことばの明らかな遅れあるいは欠如が知的障害のためであると考えられる傾向がある。しかし、非言語性精神年齢 (nonlinguistic mental age: NLMA) や、平均発話長 (Mean Length of Utterance: MLU) で統制した知的障害児と自閉症児の言語知識を比較し、両者の言語知識が異なっていると指摘する研究もある (Pierce & Bartolucci, 1977; Tager-Flusberg, Calkins, Nolin, Baumberger, Anderson & Chadwick-Dias, 1990)。

Pierce et al. (1977) は、自閉症児を非言語性精神年齢で統制した定型発達児、知的障害児と比較した。その結果、自閉症児は完了形や、受動文などのような複文構造をもつ文の使用が定型発達児、知的障害児と比べて少なかったと報告している。

また、Tager-Flusberg et al. (1990) は、MLU で統制された自閉症児とダウン症児の自発話を収集し、名詞句や動詞句、文構造の産出について検討している。その結果、自閉症児、ダウン症児ともに MLU と統語的側面は比例して発達し、統語的、形態論的な発達は両群間で似たようなパターンを示した。しかし、自閉症児が自発的に使用する統語構造の複雑さは、定型発達児のみならずダウン症児と比べても乏しかったとしている。

しかし、Tager-Flusberg et al. (1990) のような自発話を収集した研究結果は、言語学的な統語の問題を反映するというよりもむしろ、会話場面についての認知と密接に関連している可能性がある。そのため神尾 (2007) は、自閉症児の統語について、純粋に言語学的な知見から統語に問題があるかどうかはこのような研究からは断定できないと指摘している。

以上、自閉症児の統語的側面について欧米における研究を概観した。その結果、欧米における研究では形態素に着目した研究や、自閉症児の統語知識の特徴を SLI 児や知的障害児と比較する研究がみられた。また、自閉症児の統語知識は知的障害児やダウン症児と異なっていると報告もみられた。

以下3節において、日本語を母語とする自閉症児の言語研究を概観し、今後の研究課題を指摘する。

### 3. 日本における自閉症児の言語研究

綿巻 (1997) は、MLU で統制した自閉症児と知的障害児 (綿巻 (1997) では精神遅滞児) を比較し、共感獲得表現助詞「ね」の使用を検討した。綿巻 (1997) によれば、「ね」は会話文の文末に付加されて、聞き手との、話題の相互共通性を表すのに使われる終助詞である。自閉症児は、情報を聞き手と共有することにも障害があるため、「ね」の使用において困難さが予測される。研究の結果、格助詞や係助詞などでは自閉症児と知的障害児との間に差異はなかったのに対し、綿巻 (1997) の予測したとおり、自閉症児には「ね」の使用が全くみられなかった。対照的に知的障害児では、「ね」の使用は全発話の中で2番目に使用頻度の高い助詞であった。この結果を、綿巻 (1997) は自閉症を共同注意や心の理論の障害とみる仮説からすると、それらに関わる助詞である「ね」の使用の問題が言語面に現れた結果と考えられると述べている。

また、伊藤・田中 (2006) は、自閉症児の指示詞の理解に関する研究を行っている。指示詞は、発話場面

や発話の文脈の手がかりを理解しなければ正しい理解ができないという語用論的側面がある(伊藤・田中, 2006)。対象児は5歳以上の定型発達児及び自閉症児で、自閉症児は知的障害の要因を排除するため全IQ(FIQ)が75以上の自閉症児を対象とした。研究の結果、自閉症児は定型発達児よりも指示詞の理解が有意に低く、他者の視点取得の困難さの要因と関連している可能性が示唆された。伊藤ら(2006)はこの結果から、自閉症児の指示詞の理解は話し手の意図を読む能力の欠如に由来している可能性を指摘し、語用論的側面からの考察を行っている。また、伊藤(2012)によると、自閉症児は定型発達児と比べて指示詞を理解する際の指さしなどの非言語情報を活用していなかった。この結果からも、伊藤(2012)は自閉症児の語用論的能力の問題を指摘している。しかしながら、指示詞には、現場の事物や話題の中の事物が、話し手・聞き手が関係する諸領域の中のどの領域にあるかを示すという文法的な働きもある(益岡・田窪, 1997)。このことから、指示詞の理解の困難さは語用論的側面だけではなく文法的側面の障害としても捉える必要があると考えられる。

また藤上・大伴(2009)は、獲得語彙に関する研究で自閉症児と知的障害児を比較し、その中で助詞や助動詞の獲得についても検討している。対象児を、発達年齢(Developmental Age; DA)40ヶ月未満と40ヶ月以上に分け、獲得語彙の特徴と発達過程について検討した。その結果、助詞・助動詞の獲得についてみた場合、知的障害児はDAが40ヶ月以上になると、助詞・助動詞が増加し、より複雑な文を構成することが示唆された。一方、自閉症児はDAが40ヶ月以上になっても、対人指向的な終助詞を含む助詞・助動詞の獲得がみられなかった。このことから、藤上・大伴(2009)は、自閉症児の獲得語彙は、自閉症児の社会性や認知の発達と大きく関わっている可能性を示唆している。

以上のように、日本においても自閉症児の言語についての研究が行われてきているが、その多くが語用論的側面と関係したものである。先に述べたように、語用論的側面を理解するには、その前提としてことばの文字通りの意味の理解が重要であると思われる。

次節では、日本語における自閉症児の言語獲得研究の今後の課題について述べる。

#### 4. 日本における自閉症児の言語研究の今後の課題

これまで述べてきたように、日本における自閉症児

の言語研究は、語用論的側面からの報告が中心である。近年欧米においては、英語を母語とする自閉症児の統語的側面の研究が行われているが、我が国においては、そのような研究はほとんど行われていない。日本語においても自閉症児の言語の統語的側面に焦点をあてた研究が必要であると思われる。

今後の日本語を母語とする自閉症児の統語的側面の研究課題のひとつとして、例えば受動文に関する研究があげられる。受動文は、統語構造の中でも研究が進んでおり、統語知識の獲得研究において重要な役割を担っている。また、能動文を受動文にするためには視点を主語から目的語に移動する必要がある。視点をおくことが容易であるとされる主語寄りの視点を、視点をおくことが困難であるとされる目的語寄りの視点に移動させることは、自閉症児の他者視点取得の困難さという障害特性を考えると、自閉症児にとっては困難であると推測される。我が国において、自閉症児の受動文を検討したものとしては、わずかにNaito and Nagayama(2004)の研究があるのみである。今後さらに自閉症児を対象とした受動文に関する研究が必要であると考えられる。

また、もう一つの研究課題としては、授与動詞に関する研究があげられる。自閉症児は、自分と他者、人と物などの関係性を理解するなど、相互の関係を理解することに困難をもつとされている(小林, 1984)。そのため、高橋・野呂(2005)は、「あげる-もらう」のような授与動詞の獲得に困難を示す自閉症児が多いと指摘している。自閉症児の授与動詞の獲得については、応用行動分析の視点からはその獲得の促進や、理解の指導に関する研究が行われているが(佐野・宮崎・加藤・酒井・井上, 2008; 高橋・野呂, 2005)、言語学的に検討されたものはないようである。授与動詞の研究も自閉症児の言語研究にとって、重要な研究課題の一つであると思われる。

さらに、否定辞や時制辞のような形態素の獲得に関する研究も考えられよう。第2節で述べたように、欧米においては自閉症児の形態素の誤用に関する研究がいくつか行われている。それらの研究で、英語を母語とする自閉症児は形態素の獲得に困難さをもつことが明らかになっている。日本語においては、「食べ/させ/られ/なか/った」のように語幹に多くの形態素を付加することができる。これらの形態素を、日本語を母語とする自閉症児がどのように獲得しているかについての研究も、今後の自閉症児の言語研究の課題であると思われる。



## 文 献

- Baltaxe, C. A. M., & Simmons, J. Q. (1975) Language in childhood psychosis: A review. *Journal of Speech and Hearing Disorders*, 40, 439-458.
- Botting, N., & Conti-ramsden, G. (2003) Autism primary pragmatic difficulties, and specific language impairment: Can we distinguish them using psycholinguistic markers? *Developmental Medicine and Child Neurology*, 45, 515-524.
- Boucher, J. (2003) Language development in autism. *International Congress Series*, 1254, 247-253.
- 藤上実紀・大伴潔 (2009) 自閉症児の獲得語彙に関する研究—知的障害児との比較による検討—. 東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 60, 487-498.
- 伊藤恵子・田中真理 (2006) 指示詞コ・ソ・アの理解からみた自閉症児の語用論的機能の特徴. 発達心理学研究, 17 (1), 73-83.
- 伊藤恵子 (2012) 言語情報と非言語情報の不一致場面における自閉症スペクトラム障害児の指示詞理解の特徴. 特殊教育研究, 50 (1), 1-11.
- 神尾陽子 (2007) 自閉症スペクトラムの言語特性に関する研究. 笹沼澄子編. 発達期言語コミュニケーション障害の新しい視点と介入理論, 医学書院, 55-70.
- Kanner, L (1943) Autistic disturbances of affective contact. *Nervous Child*, 2, 217-250.
- Kanner, L (1946) Irrelevant and metaphorical language in early infantile autism. *Am J Psychiatry*, 103, 242-246.
- 黒田吉孝 (1987) 話し言葉をもたないある自閉症児のコミュニケーション活動の発達と障害の研究—5年間の追跡研究—. 特殊教育研究, 25 (2), 61-67.
- Lord, C., & Paul, R. (1997) Language and communication in autism. In D. J. Cohen & P. R. Volkmar (Eds), *Handbook of Autism and Pervasive Developmental Disorders* (2nd ed., 195-225), New York.
- Lord, C., & Rutter, M. (1994) Autism and pervasive developmental disorders. In *Child and Adolescent Psychiatry: Modern Approaches (3rd edn)* (eds M. Rutter, E. Talor & L. Hersov), 569-593.
- Lord, C., Risi, S., & Pickles, A. (2004). Trajectory of language development in autistic spectrum disorders. In M. L. Rice & S. F. Warren (Eds.), *Developmental Language Disorders: From Phenotypes to Etiologies* (pp. 7-29) (pp. 411). Mahwah, NJ, US: Lawrence Erlbaum Associates.
- Loveland, K., McEvoy, R., Tunali, B., & Kelley, M. L. (1990) Narrative story telling in autism and Down's syndrome. *British Journal of Developmental Psychology*, 8, 9-23.
- Pierce, S., and Bartolucci, G. (1977) A syntactic investigation of verbal autistic, mentally retarded, and normal children. *Journal of Autism and Childhood Schizophrenia*, 7 (2), 121-134.
- Naito, M., and Nagayama, K. (2004) Autistic children's use of semantic common sense and theory of mind: A comparison with typical and mentally retarded children. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 34, No.5, 507-519.
- Rice, M. L., Warren, S. F, and Betz, S. K. (2005) Language symptoms of developmental language disorders: An overview of autism, Down syndrome, fragile X, specific language impairment, and Williams syndrome. *Applied Psycholinguistic*, 26, 7-27.
- Roberts, A., Rice, M. L, and Tager-Flusberg, H. (2004) Tense marking in children with autism. *Applied Psycholinguistic*, 25, 429-448.
- Rutter, M. 渡辺直登訳 (1982) 診断と定義. Rutter, M. & Schopler, E. (Eds). 丸井文男監訳. 自閉症—その概念と治療に関する再検討一, 黎明書房, 11-39.
- 佐野基雄・宮崎光明・加藤永歳・酒井美江・井上雅彦 (2008) 自閉症生徒における授与動詞を用いた文章の助詞理解指導. 発達心理臨床研究, 14, 119-130.
- Tager-Flusberg, H. (1981) On the nature of linguistic functioning in early infantile autism. *J. Aut. Devel. Disor*, 11 (1), 45-56.
- Tager-Flusberg, H., & Anderson, M. (1991) The development of contingent discourse ability in autistic children. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 32, 1123-1134.
- Tager-Flusberg, H, Calkins S., Nolin T, Baumberger T., Anderson M., & Chadwick-Dias, A. (1990) A longitudinal studies of language acquisition in autistic and Down syndrome children. *J Autism Dev Disord* 20: 1-21.
- Tager-Flusberg, H. (1994) The relationship between language and social cognition: Lessons from autism. In Yonata Levy (Ed), *Other Children, Other Languages Issues in the Theory of Language Acquisition*. Lawrence Erlbaum Associates, New Jersey, 359-381.
- 高橋甲介・野呂文行 (2005) 自閉症児における授与動詞獲得の検討—高次条件性弁別による分析と分化結果手続きを用いて—. 心身障害学研究, 29, 181-188.
- 綿巻徹 (1997) 自閉症児における共感獲得表現「ね」の使用の欠如: 事例研究. 発達障害研究, 19 (2), 146-157.
- Wetherby, A., and Prutting, C. (1987) Profiles of communicative and cognitive-social abilities in autistic children. *J. Spee. Hear. Res*, 27, 364-477.
- Wilkinson, K. M. (1998) Profiles of language and communication skills in autism. *Mental Retardation and Developmental Disabilities*, 4, 73-79.

# 自閉症児の言語に関する研究の現状と課題

## Contemporary Research Findings and Issues in Studies of Language among Children with Autism

竹尾 勇太\*・伊藤 友彦\*\*

Yuta TAKEO and Tomohiko ITO

特別支援科学講座

### Abstract

This study reviewed research on the language of children with autism, and discussed the issues of further studies of language in such children. First, we reviewed the literature on syntactic aspects of autistic children in Europe and the United States. It was reported that children with autism made morpheme errors. In addition, similarities and differences have been compared among autistic children, children with intellectual disabilities and those with Specific Language Impairment (SLI). Second, we noted that in Japan, few studies on the language of children with autism have been reported, except those on pragmatic aspects, and pointed out the need for studies of syntactic aspects of language in children with autism in Japan. Finally, we proposed several issues which must be investigated for further research on Japanese children with autism.

**Key words:** research findings, autism, language, syntax

*Department of Children with Disabilities, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

**要旨:** 本稿は従来の自閉症児の言語研究を概観し、自閉症児の言語研究に関する今後の課題を論じたものである。まず欧米における自閉症児の統語的側面に関する研究を概観した。欧米における研究では、形態素の誤用が指摘されていた。また自閉症児、SLI児、知的障害児との類似点や相違点を比較した研究がみられた。次に、日本においては、語用論的側面以外の自閉症児の言語に関する研究はほとんど報告されておらず、特に統語的側面に関する研究が必要であると指摘した。最後に、日本語を母語とする自閉症児の言語研究における今後の課題を提示した。

**キーワード:** 研究の現状, 自閉症, 言語, 統語論

---

\* Graduate School of Education for Children with Disabilities, Tokyo Gakugei University

\*\* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)